1　緒　　言

興福寺の起源は、天智天皇８年（669）に、中臣（藤原）鎌足夫人の鏡女王が、鎌足の病気平癒を祈願して建立した山階寺にある。その後、藤原氏の氏寺として平城遷都とともに、平城京の外京にあたる左京三条七坊の地に移され、興福寺と号し、1300年あまりの間法灯を守り続けてきた。

平城遷都からまもなく造営が開始された興福寺は、藤原氏や朝廷の力などによって中金堂、北円堂、東金堂、五重塔、西金堂、講堂、食堂、三面僧坊と順次整備が進み、奈良時代の終わりには、ほぼ伽藍の完成をみる。さらに、弘仁４年（813）には、その後の観音信仰にともない興福寺を代表する信仰施設となる南円堂が建立され、また子院が寺中、寺外に建てられるなど、寺の規模はより拡充され、南都寺院勢力の中心的な存在となっていった。

長い歴史のなかで度重なる罹災と復興を繰り返し、盛時は堂塔その他の建物が170余宇といわれた興福寺も、明治維新後の神仏分離令、廃仏毀釈では壊滅的な打撃を受け、廃寺同然となった。築地塀、食堂、細殿、庫裡などは撤去され、五重塔、三重塔も売却の危機にあったが、明治14年（1881）に寺号の復号許可が出され、翌年には管理権が興福寺に返還された。

明治13年の太政官布達により、境内が公園として整備されはじめ、興福寺の再興への気運も高まり、往時の規模とは比較にならないものの、現在２万５千坪の境内地と、五重塔・北円堂など４棟の国宝建造物をはじめとして、彫刻、工芸品など26件の国宝、建造物、美術工芸品をあわせて44件の重要文化財を有し奈良を代表する寺院となっている。

第１図　中金堂院全景（五重塔より望む、左中央フェンス内が調査地）